

2010年「エルサレムの日」

2010年5月9日 アシェル・イントレーター

この水曜日はイスラエルにおいて、1967年6月4日のエルサレム解放43回目（ヘブライ暦による）を記念する「エルサレムの日」（注）です。ユダヤ人によるエルサレムの回復と再獲得について、**ルカ 21:24**（**ゼカリヤ 12:6**も参照）においてイエシュアは預言しました。

注：エルサレムの日（ヨム・イエルシャライム）：紀元70年のエルサレム陥落以来、エルサレムはユダヤ人の所有から離れましたが、長い離散の歴史の果てに、1967年6月7日（ヘブライ暦イアルの月28日）、六日戦争中エルサレムは再びユダヤ人の手に戻りました。（六日戦争自体の戦闘は6月11日に終結）紀元70年から実に1897年ぶりの回復です。そこで、イスラエルでは毎年ヘブライ暦イアルの月28日に「エルサレムの日」を祝うため、西洋暦では毎年違う日に祝うことになります。今年2010年は5月12日がイアルの月28日に当たります。（イアルの月はヘブライ暦で第2月です）Wikipedia “Jerusalem Day”より要約

残念ながら、イスラムの聖戦主義者と世俗的人間中心主義者は、この出来事を解放ではなく、占領と見なしています。ユダヤ人によるエルサレム所有という問題は国際政治の間で最も論争を呼ぶ命題です。事実として、この問題は紛争の中心となるのであり、**ゼカリヤ 12:2-3**に預言されています。

ユダヤ教徒、キリスト教徒、そしてイスラム教徒はアブラハムを信仰の父と見なしています。聖書での物語は**創世記 12:1**から始まり、神はアブラハムに、彼の知らない場所へと移動するよう指示しました。その場所はもちろんエルサレムであり、またモリヤ山として知られていました。そここそ、アブラハムはイサクを「犠牲として捧げる」よう命じられた場所なのです。（**創世記 22章**）

創世記 12:1のラビによる解説は、「アブラハムの旅はすべてエルサレムを目指すものであった」としています。イスラム教によりますと、アブラハムはイサクではなく、イシュマエルを捧げたと信じています。エルサレム（またはシオン）は聖書に800回述べられていますが、コーランには1回も述べられていません。イスラム教徒はメッカを彼らの「聖なる都」として見ており、東エルサレムに住むイスラム教徒が祈る時、彼らはメッカの方向に向かって平伏するため、神殿の丘に背中と足を向けるのです。

エルサレムはヘブライ預言者によって、メシアの王国の宗教的、かつ政治的な中心地として見なされています（**イザヤ 2:1-4**、**ミカ 4:1-8**）。そこは、ダビデやソロモンの王国の首都であり、神殿祭儀の場所でした。ヨハネの黙示録には、エルサレムは天と地が合わさり、エデンの園が回復する地として描かれています（**黙示録 21:2**、**10**、**22:2**）。

キリスト教の伝統では、エルサレムの天的な側面がより強調されていますが、ユダヤ教の伝統では、エルサレムの地理的な位置がより強調されています。ユダヤ文化における、エルサレムの中心性について、いくつか例を挙げます（ベガン、ナホン、メイル）。

1. ユダヤ祈祷書にある、日々の「18の祈り」の中に、エルサレムはダビデの首都として回復することが含まれている。
2. 過越の食事(セダー)は、「次の年はエルサレムで」という期待によって締め括られる。
3. 各ユダヤ人の結婚式において、ワイングラスを割って次のように宣言して式を締め括る。
「エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。もしも、私がおまえを思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。」(詩篇 137:5-6)
4. 食後の祝福の祈りの後、宗教的ユダヤ人はエルサレムの回復を祈る。
5. 世界中にあるユダヤ人のシナゴグは、アーク(訳注:トーラーの巻物がしまわれている、両開きの扉が付けられた棚のこと)の位置と人々が祈る時の方向がエルサレムに向くよう造られている。

新約聖書においても、エルサレムは少なくとも、同じぐらい重要な場所として取り上げられています。イエシュアが来られることについての預言はエルサレムの神殿で与えられました(ルカ 1:10-11、2:25、2:36)。イエシュアはエルサレムで割れを受けました(ルカ 2:21)。イエシュアは神殿を浄め、そこで教えました(ルカ 19:45、20:1)。主はエルサレムで十字架にかけられ、そこで死から甦えられました。エルサレムから主は天に上られ、再びそこに帰ってくると約束されました(使徒 1:10-11)。

エルサレムで聖霊が初期の弟子たちに注がれ(使徒 2:1-4)、そこから彼らは世界宣教の活動を始めました(使徒 1:8)。エルサレムでの使徒たちによる会議は、世界中の初代教会の霊的権威の中心として見なされていました(使徒 15:6、22、30)。

新約聖書でのエルサレムの重要性は 2000 年前に起こったことだけでなく、将来の預言やメシアの再臨の場所としての重要性を持ちます。エルサレムから世界を覆うリバイバルが広がります(使徒 2:17)。終わりの時にエルサレムからメシアニック運動は「**主の御名によって来られる方に祝福あれ**」(マタイ 23:39)と叫び、イエシュアの再臨を迎えるのです。

事実、イエシュアはエルサレムに戻って来られるのであり、エルサレムでのメシアニック・リバイバルは主の再臨の前提条件とされていることにより、この街がダビデの王国で起こったこと、福音書で起こったこと、そして初代教会で起こったこと以上の重要性をもたらしています。人類の対する神のご計画はエルサレムにおいて、クライマックスを迎えるのです。

このような理由により、エルサレムは現在政治的にも霊的にも論争を呼ぶのであり、終わりの時に関するすべての預言は艱難期を語っており、そのクライマックスとして、すべての国々がエルサレムに対して攻撃を加えるという大いなる戦いが起こるのです。(ゼカリヤ 14:1)。その時点でイエシュアは再臨します。主の足はオリブ山に立ちます(ゼカリヤ 14:4)。主はエルサレムに対抗してくるすべ

ての国々に対して戦いをしかけます(ゼカリヤ 12:2、9、14:3、12)。そして、王国を建てて平和と繁栄の場所とします(イザヤ 2:4、ミカ 4:4-6、ヨエル 3:17-18、ゼカリヤ 14:14)。

エルサレムを巡る戦いはその街を第一としたものではありません。エルサレムはイエシュアの御国の首都であり、地上における主の権威を表します。論争を呼ぶのは、この地における政府を誰が支配し、どのようにその政府が運営されるのかという、神の決定権を巡るものであるのです。「**地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とに逆らう。**」(詩篇 2:2)

神は人(イエス)と場所(エルサレム)を選ばれました。一方または両方を拒絶することは、最終的には神の権威を拒絶することとなります。イエスの王権とエルサレムという場所は神の権威と人類の反抗が対立する地点なのです。「**しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。**」(詩篇 2:6) 誰を選び、そしてどのように支配したいのかは、神の権利なのです(詩篇 132:13、17)。

今週、私たちは皆さんをご招待し、共に「エルサレムの日」で一緒になり、そして「**エルサレムの平和のために祈れ。おまえを愛する人々が栄えるように。**」(詩篇 122:6)と祈りましょう。